

【 読点の打ち方 】

- 内容が正確に伝わるよう、また、読み誤りが起きないように、読み手の立場に立って、読点を打つ場所に意識を向けながら文章を書くようにしよう。
- 以下はあくまで原則であり、筆者の意図や文の長さによって読点を打つ場所が調整される場合がある。

読点の打ち方	
①主語のあと	(1)「 <u>叙述の主題となる主語</u> 」のあと ・ゾウは、鼻が長い。 (2)助詞が省略された主語のあと ・ <u>ぼく</u> 、もう宿題は済んだよ。 ※「 <u>ぼくは</u> 」の「は」が省略されている。
②並列関係にある語句の間	(1)重文(主語・述語を備えた文の、対等な連結) ・おじいさんは山へ柴刈りに、おばあさんは川へ洗濯に行きました。 (2)述語が二つ以上続くとき ・犬が立ちあがり、 <u>ほえだした</u> 。 (3)語句が二つ以上並列するとき ・ <u>静かな</u> 、 <u>明るい朝</u> のひとつです。 (4)同格(イコール関係) ・それは <u>1945年</u> 、 <u>昭和20年</u> のことであった。
③条件や限定を表す文のあと	(1)条件や限定を表す文のあと ・犬が追いかけてきたので、 <u>走って逃げた</u> 。 (2)時・場合などを表す語句のあと ・ <u>その時</u> 、戸があいた。 (3)接続語のあと ・ <u>しかし</u> 、誰一人彼を理解しようとはしなかった。 (4)文頭に用いる副詞のあと ・ <u>もしも</u> 、雨がふったら…。 (5)感動詞のあと ・「 <u>おお</u> 、寒い。」(感動)、「 <u>おはよう</u> 、花子さん。」(あいさつ)、「 <u>もしもし</u> 、山田さんのお宅ですか。」(呼びかけ)、「 <u>はい</u> 、そのとおりです。」(応答)、「 <u>さあ</u> 、始めよう。」(かけ声)等 ※感動詞:感動、あいさつ、呼びかけ、応答、かけ声などを表す言葉。
④倒置文の場合	(1)主語の前 ・やぶの中から、 <u>ウサギ</u> が出てきた。 (2)述語のあと ・ <u>ぼくは知らないよ</u> 、そんなこと。
⑤カギの前 ※会話・引用文の場合	(1)カギの前 ・次郎が、「 <u>あれは何だろう</u> 」と言った。 (2)会話や引用文をカギで囲まない場合、その前後 ・次郎が、 <u>あれは何だろう</u> 、と言った。
⑥読み誤りや、読みにくさをさける	(1)読み誤りを避ける場合 ・「大急ぎで、 <u>逃げる男</u> のあとを追いかけた。」 ・「大急ぎで <u>逃げる男</u> のあとを、追いかけた。」 (2)読みにくさを避ける場合 ・裏の山の、松の木の上の鳥の巣が、風でこわれてしまった。 ※「の」の連続使用や、「の」による単純連結にも注意しよう。
⑦読みの ^ま 間	・ <u>チリン</u> 、 <u>チリン</u> と、涼しげに風鈴が鳴る。 ※「チリン、チリン」とするか、「チリンチリン」とするか、読点を打つ場所やその有無によって、風鈴の鳴り方の違いを表すことができる。
⑧！(感嘆符)と？(疑問符)について	・もともと外国語に用いられる符号であり、和文に用いる場合は意図や効果を考えて使うようにしよう。